

養護教諭から見た学級担任のコミュニケーション

学籍番号 199111
氏名 田井 清美
大学院主指導教員 佐々木 靖

1. 背景と研究の目的

本研究の出発点は、「教師と児童生徒の関わりを促進するために何をすべきか」を悩み続けた、筆者自身の養護教諭としての体験にある。養護教諭としての自身が何をすれば、教師と児童生徒の関わりにどのような影響を与えるのだろうかと考えた中で、そもそも教師は日頃児童生徒とどのようにコミュニケーションをとっているのだろうかという疑問が生じた。

そこで本研究では、教師のコミュニケーション、特に日々児童生徒と深いかかわりを持つ学級担任に着目した。学級担任のコミュニケーションの特徴を明らかにすることを目的として、具体的には「学級担任の児童への働きかけ」と「学級担任の養護教諭との連携」という2つの視点から研究に取り組み、各々の立場にある教諭間の相互連携のあり方に迫りたいと考えている。

研究の方法は、質的に分析を行い考察する。具体的には、文献検討、実習校の協力学級の学級担任と児童を中心に参与観察と記述分析、実習校の教員に質問紙調査と面接という複数の手法を併用して、様々な角度から研究を進めていった。

2. 実践報告

2.1 学級担任の児童への働きかけ

教師の児童生徒に対する働きかけを客観的に捉え分析する手法は、授業分析や発話分析、談話分析などとして深められてきた。筆者は教師の児童生徒に対する働きかけの中でも、言葉がコミュニケーションに必要であり重要な手段であると考え、教師の児童生徒に対する「言葉かけ」を取り上げ検討することを考えた。

授業時間及び休み時間を通して行われる児童生徒に対する担任教師の働きかけを菊池・山本（2015）の8つの分析カテゴリーを参考に米田・西川（2019）が9つの分析カテゴリーに分類した。その米田・西川（2019）の分析カテゴリーを用いた。学級担任が児童に対して、意図や目的をもってどのような「言葉かけ」「行動」を行っているのかを明らかにすることを目的として、実習校で調査を行った。調査方法は、学級担任の児童への働きかけの中でも「言葉かけ」「行動」に着目して、授業時間や休み時間における学級担任A教諭、C教諭、児童について参与観察を行い、記述し分析した。

調査結果をふまえて検討した結果、学級担任A教諭とC教諭には各々のコミュニケーション

ョンの特徴が明らかになった。また、学級担任は様々な「言葉かけ」の 카테고리を使い分けながら児童とコミュニケーションを図っていることが明らかになった。学級担任は児童とのコミュニケーションを図る上で、学級担任の指導態度だけではなく、学級担任と児童との関係性や学級の様子により働きかけも変化し、工夫していることが認められた。

2.2 学級担任の養護教諭との連携

日頃から児童生徒に関わる機会の多い養護教諭について、学級担任の養護教諭との連携に対する意識や状況を明らかにして、各々の専門性を活かした効果的な連携について考察することを目的として調査を行った。調査方法は、学級担任の養護教諭との連携に対する評価を橋本・前田・大下・澤田(2019)の「4つの連携」のあり方に筆者が修正を加えたものを実習校の教員(養護教諭も含む)に質問紙調査を行い、分析した。また、質問紙調査の結果をふまえて個別の面接調査を行い、分析した。

調査結果から、学級担任と養護教諭各々の連携に対する捉え方の違いが明らかになった。学級担任は、形はどうであれ養護教諭と連携していると認識しており、養護教諭がクラスに関わってくれていることに対してありがたいという気持ちを持っていた。一方養護教諭は、保健室を通して得た情報を執務上でのこととして学級担任に提供しており、そのことを連携という枠で捉えていなかった。養護教諭はもっと大きな枠での位置づけで連携を捉えていた。学級担任と養護教諭の連携に対する捉え方の違いが明らかになったが、この学級担任と養護教諭の連携についての捉え方の違いは、職種の専門性に関係していると考えられた。養護教諭の連携という概念についての捉え方は、学級担任等への一方的な情報提供をすることではなく、学級担任等からも情報を得て、互いに連絡を取り、信頼できる関係でもって児童の援助に携わることであり得ると言える。

3. 総合考察

学級担任は児童とのコミュニケーションにおいてはそれぞれに工夫を見出し良い関係を築いていた。また養護教諭とのコミュニケーションにおいては養護教諭との関わりを肯定的にとらえ、常に連携を意識していることが確認できた。

以上の結果から、学級担任のコミュニケーションは明らかになったが、今後は児童の援助という共通の課題に対して、学級担任、養護教諭それぞれの専門性を活かして対応し、課題解決に向けて取り組むことが望まれる。しかし、各々の考え方の相違や多様性を当事者同士で調整することは難しい側面もある。学級担任と養護教諭の連携に対する捉え方の違いが明らかになったことにより、各々の連携については客観視ができる、管理職を含む第三者の介入が必要であると考えられる。各々の専門性を活かしながら児童に携わる上で、調整ができる人材を加え、各々の役割を明確にし、協働することで、児童への援助の幅が広がることが示唆される。